



日本膜学会会長 岡村恵美子
姫路獨協大学薬学部

日本膜学会会員の皆様、あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。コロナ禍の波が依然として続く中、当面はウィズコロナのスタイルを維持していくことが肝要となっております。学会運営も例外ではありません。日本膜学会においても、年会と膜シンポジウムを一昨年はオンラインで行っていましたが、昨年は春の年会はハイブリッド方式で、秋の膜シンポジウムは3年ぶりに神戸で対面で開催することができました。オンラインでの学会開催は移動を伴わずに済むことから便利な面も多々ありますが、やはり、現地で顔を直に突き合わせながら議論を交わすことの意義・重要性を再認識したのは私だけではないように思います。

さて、いよいよ今年には国際膜学会議、ICOM2023が幕張で開催されます。今のところ対面での開催が予定されています。また、春の年会は膜シンポジウムとの合同大会として秋の開催となります。日本膜学会にとって本年は節目の年であり、これまでの集大成としてのICOM2023の成功と年会・シンポジウム合同大会の実施が滞りなく進みますよう願っております。同時に、来年以降の膜学会の活動について一度振り返る良い機会でもあります。幸い、ICOM2023の準備は順調で、秋の年会・シンポジウム合同大会の開催準備もすでにスタートしております。関係者のご尽力に感謝するとともに、これらを足掛かりとしてさらに活発な活動が展開されますことを期待しております。

1. 学会活動のさらなる活性化を目指して

日本膜学会は「膜」をキーワードに、人工膜・生体膜・境界膜を研究対象とする異分野の研究者が集う特色のある学会です。昨年は、この伝統を引き継ぎながらも、法人化後に休止していた評議員会の再開、若手の会の充実（新しい世話人の参画）、膜誌における新たな企画提案など、これまでになかった試みもスタートさせることが決まりました。評議員会では構成メンバーをさらに充実させて、将来活躍が期待される若手の研究者や産業界会員の方にも入っていただきました。会員のニーズを幅広く把握し、より多くの会員のご意見を伺う場として活用させて頂きたいと思っております。また、若い世代の会員を中心とした若手の会は、次世代の膜学会を担う人材が活躍できる場として大変重要と考えています。人工膜・生体膜・境界膜分野を代表する世話人の方を中心に、学会としても活動を支援して参りたいと思っております。

2. ICOM2023と年会・シンポジウム合同大会の開催

ICOM2023の開催と年会・シンポジウム合同大会の開催は、日本膜学会にとって大きな意味をもつ本年の2大イベ

ントです。7月に開催されますICOM2023は前回横浜で開催されたICOM1996以来27年ぶりの国内開催ということで、日本の膜科学・膜工学・膜技術を世界に発信する絶好の機会となります。ちょうど、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、2050年カーボンニュートラル実現を目標とした省エネルギーな膜分離や水処理など膜研究者が貢献可能な領域は多いと考えられます。その意味で、ICOM2023がこの分野で世界をリードする日本の膜技術のプレゼンスをアピールする場となることが期待されます。また、日本膜学会の特徴を活かして、人工膜・境界膜に加えて生体膜のセッションが設けられるなど、特色ある国際会議となりそうです。生体膜関係では、膜を介した生命現象に焦点を当てて、そのメカニズム解明から創薬に至る研究が行われておりますが、これらは、癌の新たな診断・治療薬、感染症治療薬の開発、認知症の予防戦略など、急速な高齢化社会を迎えた現代において非常に重要な視点となります。

一方で、本年秋に予定されております合同大会の開催は、膜学会の歴史が始まって以来初めてのイベントになることと思います。2023年度に国内規模で行われる唯一の研究発表の場となりますので、例年以上の活発な議論が大会に集約されるものと期待されます。毎年行われておりますシンポジウムと毎年の膜シンポジウムにおける充実した討論の“いいとこ取り”を採用することで、大変有意義な大会となることが予想されます。会員の皆様方には、本年実施される国際会議と国内会議の2大イベントの成功に向けてなお一層のご支援をお願いするところです。

3. 膜誌について

本年は学会行事の開催がイレギュラーになることになって、膜誌における新たな企画提案など、これまでになかった試みもスタートする予定です。ご承知の通り、膜誌は人工膜から生体膜までの広い分野の専門家によるレベルの高い総説を提供することによって、本学会の当初からの目的であります「生体膜から人工膜に至る幅広い膜領域の融合を図り、新たな膜科学の研究領域を開拓する」ことに貢献するための学術誌として位置付けられております。これに加えまして、本年は学会の次代を担う若い世代による執筆の機会を増やすことを目指します。具体的には、ご自身のこれまでの研究紹介と今後の展望、ミニレビュー、博士論文の紹介、留学体験記などなど、新企画も考慮に入れながら、膜誌の編集を行ってまいりたいと思っております。若手の会員の皆様には、あらためてご自身の研究を振り返る良い機会となることと思います。研究室の先生とも相談の上、是非とも積極的な投稿をお願い申し上げます。

現在、膜誌は年に6回冊子体を会員の皆様にお届けしております。一方で、経費も依然として大きいものがあります。時代の流れも加味しながら、今後更なる経費削減に向けて、オンラインジャーナル化なども選択肢に加えながら考えて参りたいと思っております。

4. 情報の発信・会員への還元

本年も引き続き膜学会会員の皆様に少しでも多くの有益な情報を提供して参ります。メールマガジンや膜誌を最大限ご活用いただくことで、会員の皆様が知識や情報を積極

的に取得することができますよう願っております。さらに、昨年に引き続き、本年3月にも二酸化炭素分離膜についての講演会が開催されます。オンライン形式での開催となりますが、貴重な情報源としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、会員の皆様方には、本年も膜学会の活動にご支援の程宜しくお願い申し上げますとともに、今後の膜学会の発展のために一層のご指導ご鞭撻をいただければ幸いに存じます。